三田の狛犬

調べ歩きのいきさつ

神社詣のその度毎に、鳥居脇・社殿前に置かれている狛犬の異形さと、彫りの深いノミのあとにひかれていった。三田には殊に古い時代の国指定重要文化財の狛犬があることは早くから知っていたし、それによく似た未調査の狛犬があることも聞いていた。いつかは市内全域にわたって調べてみたいと思っていたところ、志を同じくする会員とグループが組めたので、折々誘い合って写真と記録を採りあつめた集大成がこのレポートである。

狛犬の名称

「こまいぬ」と読む。「狛(ハク)」は漢和辞典には「獣の名、狼に似た獣でよく羊を駆る」、国語辞典には「高麗(コマ)、狛犬の略」と書いてある。平安時代後期ごろの物語に「獅子こま犬」とあるので、早くから呼び名はあったようであるが、「こま」が高麗、すなわち「韓国(からくに)」を指すのか、「唐国(からくに)」なのか、それが「唐犬(からいぬ)」「唐獅子(からじし)」と同じ獣となるのか、このあたりははっきりしない。実際に社殿前で見る彫物は犬のようであり、頭上に角を持つ不可解な一角獣でもある。

狛犬の歴史

狛犬の起源は諸説あって定説はない。狛犬でなく、元来は仏法を守護する獣、仏の眷属(けんぞく)として廟所(びょうしょ)などに配かれていた獅子が、このように変わったという。朝鮮半島から、中国大陸から古代仏教伝来の時、飛鳥・奈良時代にもたらされたから獅子が、神仏習合という日本独自の信仰形式の中で、狛犬の形態ができたようである。

はじめは社殿内陣の風帳左右に置かれていた。殿内に邪気の侵入

を許さぬ気迫を顔面に、四肢にあふれるばかりに込めて、神殿守護の任についていた。時代が下がるにつれて屋内から屋外へ置かれるようになっていった。奈良東大寺の南大門の石造狛犬は鎌倉時代初期、宋より渡来の石工作である。本殿大床の左右に祭られる一対の狛犬は雨露がしのげるので木造、戸外のものは石造というように変っていった。現在のように、どこの神社へ行っても奉納された石造狛犬が見られるようになったのは江戸時代、それも中期以降から明治にかけての間である。

狛犬の材質

(1)石造

そのほとんどが石造物といってよい。別表でみるように近・現代の奉納物である。置かれている位置は先に述べたように社殿前、戸外にあって、その多くは正面階段下の左右にある。

石材は江戸時代、明治に入って作られたものは和泉砂岩系、以降には御影石が多い。在銘のもので古いものは三田天満神社本殿鳥居前下段にある「寛政九年(1797)」、これに次ぐのは高売布神社本殿玉垣内にある「文化十三年(1816)」であり、両者の顔立ちに類似点がみられる。

(2)木造

一木造りと寄木造りとあって、桧・カヤが多い。国指定重要文化財の高売布神社のものは足裏に「永仁五年(1297)」銘、県指定重要文化財の小柿天満神社のものは「康応元年(1389)」の墨書銘があるところから、製作奉納年月が判明した。小柿の狛犬は故児玉尊臣氏により早くから「木彫のものとしては高平高売布神社の狛犬は重要文化財であり、これと同型のものが小柿天満神社、藍本酒滴神社にもあ

る。貴重なものである。」と紹介されていた。今回の調べ歩きも、もっと詳細な調査の必要を感じたので三田市教育委員会・兵庫県立歴史博物館に依頼、その結果一対の阿形狛犬足裏から先に示したような墨書紀年銘が発見された。早速指定文化財の手続がとられ、平成元年３月に県指定文化財となった。これはこの調べ歩きの重大な功績である。

古い木造狛犬の着彩は顔料脱落剝離しているので、もとの色彩は確かめようがないが、現在木質露呈しているものも元来無色でなく、全て着色されていたと思われる。駒宇佐八幡神社のものは昔の色彩の名残りをとどめているので、寄贈当初の鮮かな色を知ることができる。一般に阿形の体色は黄(金)、髪は緑、吽形はしろ(銀)、髪は青となっているが、現代の新作品では三輪神社のように金・銀一色で覆うものもある。

(３)陶器製

焼物で作った狛犬の歴史は古い。鎌倉時代に始まり小型であった。戸外に台坐を設けて安置するものでなく、殿内御神体脇に仕える眷属として使用されたものなので一尺物(30㎝)以下である。現在日本各地で残っている古い陶製狛犬は瀬戸焼(愛知県)だという。石造狛犬と同じように社前境内に置かれるようになってからは大型化し、江戸時代に入って備前伊部焼(岡山県)のものが多く見られるようになった。市内にある陶器製のものは伊部産と思われる。

この外に瓦質製のものがある。市内では三カ所全て小型で、その中の尼寺不動堂内にある「三輪村瓦屋、武兵衛」作のものが「宝暦十三年(1763)」と古い。

(４)金属製

市内には一基もない。太平洋戦争中、金属供出して兵器生産の資

材にする運動があり、寺の梵鐘・銅像などが運び出された時、神社の銅製狛犬も同じ運命にあったという。その後、基礎台石上に再び金属製の狛犬が乗ることはなく、石造物に変わったところがあると聞く。

狛犬の形態

三田地方はいわゆる浪花狛犬と呼ばれる形態をしている。浪花狛犬というのは江戸時代中期以降に、泉州堺から積出された水成岩(和泉砂岩)を大阪横堀で陸上げされ、浪花石工の手で彫られて各地へ搬出されていったもので、三田や近在の神社で見られる狛犬のほとんどはこの類である。

外に石造物では産地の名をつけ、尾道狛犬・出雲狛犬、陶器製では伊部狛犬・瀬戸狛犬等があってそれぞれの特徴を持っている。尾道狛犬はその名のとおり広島県尾道でつくられ、瀬戸内の船便で各地へ運び出された。体はさ程大きくはない。他に見られない特異な点は、左右の阿吽共に立ち上がって前肢を玉に乗せていることである。一見してわかる。明治に入ってから尾道以外各地で玉を踏み、子をもつ狛犬がつくられるようになった。三田にはこの形態のものがある。しかし、尾道狛犬と呼ばない。出雲狛犬というのは江戸時代後期宍道湖畔来待で作られ、日本海沿岸を航海する北前船で各地に運ばれた狛犬のことである。原石の来待石も和泉砂岩同様やわらかい水成岩であるため、彫り物細工がしやすい利点はあるものの、傷み易い欠点もある。特徴は、ふつう前肢を立て後肢を折って坐する形であるのに、出雲型は前肢を曲げ後肢を立て今、正に跳びかからんとする姿勢である。三田には未発見である。

頭部を見ると**頭上**にコブ様の角(ツノ)がある。それも吽形の方に見られ

る。近世物でそれがないのは折損している場合があるので確認する必要がある。**口**は開いているのと閉じているのとあって、「阿」「吽」形といい、向かって右が阿形、左が吽形がふつうの配置である。しかし姫路地方ではこの反対のところがある。阿を雄、吽を雌として、阿に雄のシンボルをつけているが、両方共の場合もあって一概に雌雄決めにくい。けれども玉を踏みつける阿形と子を肢許に持つ吽形を見ると、陰陽・雌雄を表しているかのように見える。また平安期に書かれていた「獅子こま犬」とあるのは、阿を獅子、吽をこま犬との意見がある。これは髪の毛の形と長さからの判断であるが、それだけでは決め手にならない。いずれにせよ定説はない。**目**は木造のもので玉眼(水晶・ガラス玉)の入っているもの、**尾**は直立、横に又は、垂れているものなど多様であり、**顔立ち**も面長・角張った・丸いもの等々一様でないが、作者石工や製作地の特色が見出せるかも知れない。顔の**向き**は、古い年代に属するものはまっ直ぐを見つめ、時代が下るにつれて左右とも斜め前を見ているようである。

前**肢**は一般的には前述したように出雲狛犬を除いて直立姿勢が多い。胸を張り垂直に近いものや、角度のあるもの、長短などがあって、これがどこの誰の作であるのかの決め手にはならないが、ただ前肢つけ根部の体毛紋に或いはと思われるので今後の研究に待ちたい。

次に**尾部**である。形態の分類をもっと進めて行けば、ここが時代区分と石工集団の流派を知る手がかりになりそうである。狛犬研究家橋本万平氏は「注目したいのは尾である。一般に狛犬は、尾でその古さや素性を示してくれる。」として「古い狛犬程尾の模様が小さくて単純、素朴である。また同一の石工の系統のものは、同じか似

た模様のものが多い。」と述べ、人の指を指紋と呼んでいるように、ここを尾紋と名付けられた。三田の特色ある尾紋を載せているので参考に供したい。

調べ終わって

市域の各地をまわって写真をとり、採寸し、時にはお許しを得て舞殿の上古記録を筆写したりで、調査時の基本技術は確かに進歩した。しかしこのことよりもその土地の人々が守り継がれて来られた敬神の念の深さと、厚い信仰心を「狛犬」を通じて知った意義の方が大きかった。終わりごろにはいつも参拝者をにらみつけ威赫する狛犬の表情の裏にある善男善女への暖かい心遣い、愛情のようなものを感じるようになった。

数年にわたる調査に御協力をいただいた各位、その中でも駒宇佐八幡神社石原嘉寿巳氏、市教委文化財担当高島信之氏には特に、また多大の御助言を賜った姫路の橋本万平氏に深甚の謝意を申し上げ、今後の御指導をお願いしたい。

三田市郷土文化研究会狛犬調査同好会

代　表　　小谷　晴孝・西尾　精一

宮崎　武夫・大西　克己

杉下　　勉・金生　義人